

他地域との交流

見つかった土器や石製品の中には湖西地域以外の特色をもつものもありました。たとえば、北近畿地域の特色をもつ土器や湖南地域の特徴をもつ土器がみつかっています。

石製品には、滋賀県湖東地域でしか産出しない「湖東流紋岩」を用いた砥石が竪穴建物S108で見つかりました。湖東流紋岩は安土山や長命寺山(いずれも近江八幡市)を中心に、北は多賀町青龍山、彦根市荒神山、南は竜王町・東近江市雪野山辺りに分布しますので、当地域で湖東流紋岩製の砥石が出土したことは、琵琶湖を挟んだ対岸と日常的な交流があったことを示唆しています。

こういった遺物から当地域に居住していた人々は、琵琶湖を通じた湖上交通と陸路の交通の拠点集落として活動していたと考えることができます。



北近畿地域の特色をもつ土器



湖南地域の特色をもつ土器



湖東流紋岩製の砥石

まとめ

今回の調査で得られた知見を以下にまとめます。

- ①これまでの調査でみつかっていなかった弥生時代後期から古墳時代前期(特に3世紀を中心とした時期)の集落を発見し、出土遺物から、約200年にわたる長い期間存続した集落であることがわかりました。
- ②みつかった遺物の中には北近畿地域の特色をもつ土器や湖南地域の特徴をもつ土器、湖東地域でしか産出しない「湖東流紋岩」等がありました。これらことから、この集落は他地域と琵琶湖を通じた湖上交通と陸路を利用して交流していた集落であることがわかりました。
- ③①・②から、当地域は長い期間、水陸両方の交通の要衝であったことがうかがえ、今回みつかった集落は、交通の要衝における拠点集落として形成されていたと考えることができます。

上御殿遺跡発掘調査現地説明会資料

令和7年(2025年)7月19日(土) / 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



遺跡と調査の概要

遺跡の概要 上御殿遺跡は高島市安曇川町三尾里・田中地先に所在する縄文時代(約4,000年前)から室町時代(約500年前)にかけての集落跡です。この遺跡は安曇川や鴨川の沖積作用によって形成された湖西最大の平野である高島平野に位置し、中小河川である八田川や青井川が合流する付近に当たります。

遺跡の北西には継体大王の父「彦主人王」の陵墓参考地としてみられる田中王塚古墳が含まれる田中古墳群が、南東には全長45mほどの前方後円墳とみられる鴨稻荷山古墳が所在しています。また、古代に設けられた北陸道の駅家「三尾駅馬」は上御殿遺跡が含まれる三尾里付近が推定地となっています。

平成20年から平成26年にかけて実施された発掘調査では、国内初の出土事例である双環柄頭短剣の鋳型や古墳時代前期末(約1,600年前)の石釧、古墳時代(約1,700年前～約1,400年前)から平安時代(約1,200年前～約800年前)の木製祭祀具等が出土しています。また、遺構としては、古墳時代前期と後期の竪穴建物、古墳時代後期の古墳、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物、古墳時代から室町時代にかけての川等がみつかっています。

調査の概要 公益財団法人滋賀県文化財保護協会では高島農業農村振興事務所長からの依頼により、県営農地防災事業(青井川地区)に伴う発掘調査を令和6年10月から実施しており、現在も実施中です。昨年度の調査では、弥生時代後期(約1,800年前)から古墳時代前期(約1,700年前)にかけての竪穴建物を7棟を確認し、それに伴い当時煮炊きや盛り付けに使われた土器(弥生土器・土師器)や石製品(砥石)等が出土しました。また、今年度調査においても弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴建物を14棟と溝を確認しました。

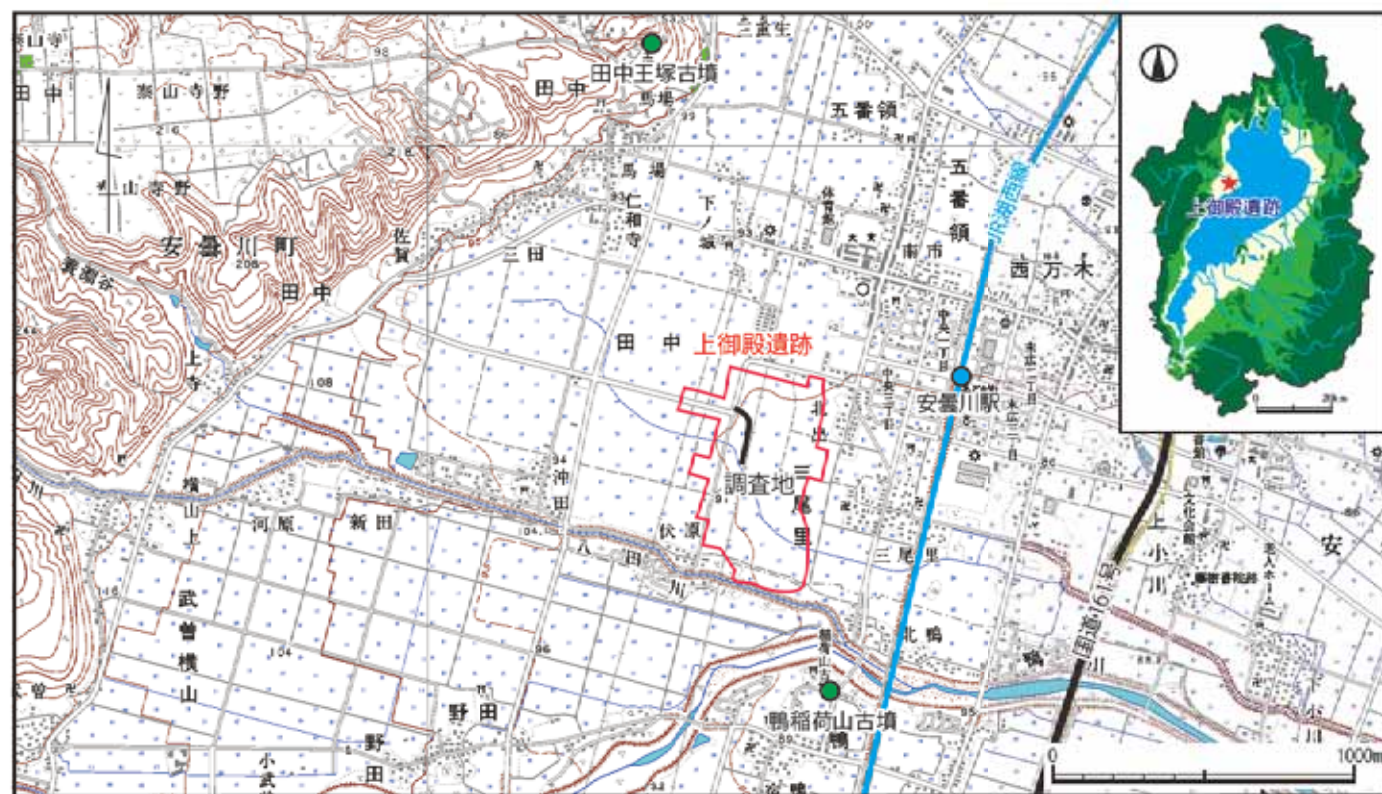


図1 上御殿遺跡の位置



図2 上御殿遺跡遺構配置図 (S=1:500)

みつかった集落跡

今回の調査では、20棟以上の竪穴建物がみつかりました。時期としては、①弥生時代後期末～古墳時代前期、②古墳時代後期の2時期に分けることができます。

みつかった竪穴建物の平面形状は四角形のものが多いですが、中には円形もしくは多角形の例(S9・S53・S105)もみつかりました。

四角形の建物は、一辺6～7mの大型のものと一辺3～4mの小型のものに分けられます。その中でS25は弥生時代後期末に属し、四角形の建物の中でも古く、新しい建物はS129で、床面から古墳時代後期の須恵器が出土しています。また、建物は重なってみつっていることから、少しずつ場所をかえて建替えをしながら生活していたようです。

建物の中には当時の床面で高坏5点と器台2点、鉢1点がまとめてみつかった例もありました(S124)。高坏3点は建物の壁に沿って内側に倒れ込んでいる状態、残り2点と器台2点は正位または逆さの状態、鉢は逆さの状態で見つかりました。

また、S128では焼けた土や木材を確認していることから、火災に遭ったとみられます。

S67・S68の南側には幅0.5m、深さ0.4mの溝(S69)がみつかりました。溝より南側では竪穴建物が希薄になることから、集落の境界として開削された溝だと推察されます。

みつかった遺物

今回の調査では竪穴建物や溝に伴って多くの弥生土器や土師器、石製品が出土しました。

土器は甕や壺、鉢、高坏、器台などの煮炊きや盛り付けに使うような土器が大多数を占めています。それらの土器は弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものばかりであることから、限られた一時期に集落が形成され、人々が生活していたようです。

石製品は砥石が竪穴建物に伴って出土しています。なかには複数面を使用していた痕跡があるものもあります。また、高島市で産出される高島石(粘板岩・頁岩)製の打製石斧等もみつっています。今回の調査では確認していませんが、近くに石器を製作する工房があったことが推察されます。



竪穴建物と溝



竪穴建物S124で土器が出土したようす



高島石でつくった
打製石斧